

## 出エジプト記11-12章 「過越の祭」

### 1A 長子の死 11

### 2A 永久の掟 12

#### 1B 記念の日 1-28

##### 1C 子羊の用意 1-14

##### 2C 種なしパン 15-20

##### 3B 血の塗付け 21-28

#### 2B 出エジプト 29-51

##### 1C ファラオの追い立て 29-42

##### 2C 異邦人の過越 43-51

## 本文

出エジプト記 11 章を開いてください。私たちは、ついに主がエジプトに下す最後の災い、第十の災いを見ます。主が、エジプトにいる長子また初子を打たれることによって、神の民イスラエルがエジプトから出られるようになります。しかし主は、イスラエルの家の長子たちは、子羊の流す血によって守り、救い出されます。そして、それを神の災いが過ぎ越す祭りとして、永遠の掟として守りなさいと命じられるのです。

神がなぜ、そこまでしてイスラエル人にこの日を大事にし、記念にしなければならないのか？神の救いにとって、これこそが根幹をなす出来事だからです。神は、御子キリストによって、その流された血によって、ご自分の民を悪い世から救い出される計画を持っておられました。「ガラ 1:4 キリストは、今の悪の時代から私たちを救い出すために、私たちの罪のためにご自分を与えてくださいました。私たちの父である神のみこころにしたがったのです。」そして、そのご自分を与えてくださったということを示す食事がありました。そうです、最後の夜の食事です。それは過越の食事の最終の事でした。これは、あなたがたのために裂かれる体です、これを取って食べなさいと言われ、それから、これは新しい契約のために、あなたがたのために流される血です、これを取って飲みなさいと言われました。私たちが、この世から守られ、この世から救われるということが、かつてのイスラエル人と同じように、神の用意されたいけにえが血を流すことによってなのだ、ということを見て行きたいと思います。

### 1A 長子の死 11

1 【主】はモーセに言われた。「わたしはファラオとエジプトの上に、もう一つのわざわいを下す。その後で彼は、あなたがたをここから去らせる。彼があなたがたを去らせるときには、本当に一人残らず、あなたがたをここから追い出す。2 さあ、民に言って聞かせよ。男は隣の男に、女は隣の女に、銀の飾りや金の飾りを求めるように。」3 【主】は、エジプトがこの民に好意を持つようにされた。

モーセその人も、エジプトの地でファラオの家臣と民にたいへん尊敬された。

九の災いをもってしても、決して心を変えなかったファラオですが、次の災いにおいては、本当に一人も残らず追い出します。その出て行く時ですが、以前、モーセを召される時にもお語りになっていたあることが起こります。それは、エジプトがこの民に好意を持つようになることです。モーセという人も、ファラオの家臣や民に大変尊敬されていました。これは驚くべきことです、彼らはモーセの預言によってここまでひどい災いを被っているのにも関わらず、そのように思われているという事は、どういうことでしょうか？

それは、ファラオのあまりにも横暴な振る舞いと頑なさが明らかにされて、それとは対照的にモーセの誠実さや聖さが伝わっているからでしょう。あるいは、エジプトの民に、正しく神のメッセージが伝わっているからかもしれません。つまり、エジプトの神々にイスラエルの神が裁きを下されたのですが、それによって確かに、この神は力ある、偉大な神なのではないか？ということです。主への証しを立てていれば、そういうことが起こります。使徒行伝で、ペテロによってアナニヤとサツピラがその偽善の罪で倒れてしまった後に、教会全体に恐れが生じたとあります。そして、人々が心を一つにして祈り、神を賛美していました。5章13節にこう書いてあります。「ほかの人たちはだれもあえて彼らの仲間になろうとはしなかったが、民は彼らを尊敬していた。」

そして、金や銀をエジプト人がイスラエル人に渡してくれるというものですが、これはおそらく、彼らも、イスラエル人が主への祭りのためにエジプトを出て行かせなさいというモーセの預言を聞いていて、それで彼らにそれをさせていかなければいけないと思ったのでしょう。古代の人は、いろいろな意味で信心深いですから、自分たちの神々だけでなく、他の国の神も彼らなりの理解で尊敬していたのではないかと思います。

4 モーセは言った。「【主】はこう言われます。『真夜中ごろ、わたしはエジプトの中に出て行く。5 エジプトの地の長子は、王座に着いているファラオの長子から、ひき臼のうしろにいる女奴隷の長子、それに家畜の初子に至るまで、みな死ぬ。6 そして、エジプト全土にわたって大きな叫びが起こる。このようなことは、かつてなく、また二度とない。』

真夜中ごろ、主が出て行くとあります。エジプトにおいて、その宗教の中で、数々の祭りにおいて、その大きなものには神々が中に出て行くというものがありました。けれどもここでは、主ご自身が出て行って、彼らに対して裁きを行われます。その裁きとは、「長子」あるいは「初子」を殺すというものです。人であれば、初めに生まれてきた男子が長子で、家畜も初めに生まれてきた雄が初子です。それが、ファラオの長子を始めとし、碾き臼の後ろにいる女奴隷の長子に至るまでとありますが、最も底辺にいる、身分の低い人の長子まで、ということです。そして家畜もその難を逃れることはできません。

なぜ、このことをもってファラオは出て行かせることにするのでしょうか？これは、ファラオ自身が神とされていたことの、究極の裁きだからです。ファラオがエジプトの神々の中でも長であって、彼によって、エジプト人は命が与えられ、豊かさが与えられていると信じられていました。そのファラオの長子こそが、その神を受け継ぐ神、つまり神の子であります。そしてファラオの恩恵によって、エジプト人の全ての命がかかっているのであり、ファラオの息子が死ぬことによって、その他の全てのエジプト人の長子と初子が死ぬということは、ファラオが神であることを徹底的に否定するものだからです。

7 しかし、イスラエルの子らに対しては、犬でさえ、人だけでなく家畜にも、だれに対してもうなりはしません。こうして【主】がエジプトとイスラエルを区別されることを、あなたがたは知るようになります。

これまでの災いで、途中から、イスラエルは区別されることによって救いが置かれていました。それがここでも起こります。犬でさえ、唸りはしないというのは、全く平穩そのものだということです。私たちにしても、救いというのは区別だということを前々回、学びました。神を信じる人とそうでない人は、全くその性質において変わることなく、本来、裁かれてもおかしくないのに、神が敢えてその憐れみのゆえに区別されて、裁きから守ってくださり、救ってくださるということです。

8 あなたのこの家臣たちはみな、私のところに下って来て、私にひれ伏し、『あなたもあなたに従う民もみな、出て行ってください』と言うでしょう。その後私は出て行きます。」こうして、モーセは怒りに燃えてファラオのところから出て行った。9 【主】はモーセに言われた。「ファラオはあなたがたの言うことを聞き入れない。わたしの奇跡がエジプトの地で大いなるものとなるためである。」10 モーセとアロンは、ファラオの前でこれらの奇跡をすべて行った。【主】はファラオの心を頑なにされ、ファラオはイスラエルの子らを自分の国から去らせなかった。

モーセは、ファラオに対して最後通牒を出しました。その後すぐに神が語られました。「ファラオはあなたがたの言うことを聞き入れない。」というものです。そして、10 節にこれまでの全てのまとめが書かれています。あらゆる奇跡を行なったが、主が彼の心を頑なにされて、イスラエル人を出て行かせなかったということです。ここで主が頑なにされたとありますが、これまでも申し上げましたように、彼が強情になっているその心を神が積極的に用いられて、それで奇蹟を行われるということです。

## **2A 永久の掟 12**

### **1B 記念の日 1-28**

#### **1C 子羊の用意 1-14**

1 【主】はエジプトの地でモーセとアロンに言われた。2 「この月をあなたがたの月の始まりとし、これをあなたがたの年の最初の月とせよ。3 イスラエルの全会衆に次のように告げよ。この月の

十日に、それぞれが一族ごとに羊を、すなわち家ごとに羊を用意しなさい。

主がお定めになった正月、第一の月は「アビブ」と言います、13章4節に出てきます。後にバビロンの名前でニサンとも呼ばれるようになります。アビブとは、「麦の穂」という意味で、大麦が熟れて来る時期になります。これが宗教における正月であります、その他にユダヤ暦では世俗的な正月もあり、それがロシュ・ハシュナと呼ばれて、ラツパを吹き鳴らす日です。このアビブの月から新しい年が始まります。

そして、「十日」に過越の羊を選び分けます。新約聖書の時代にて、ベツレヘムにおいて過越用の羊が育てられていました。そしてエルサレムで十四日に屠られます。私たちは三週間前でしょうか、棕櫚の聖日、つまりイエス様がろばの子に乗られてエルサレムに入城されたことをマタイ伝で読みました。その日が、十日になります。そして、これは基本的に家族でお祝いする祭りです。家族という単位で守るものであり、ゆえに教会において、私たちが神の家族なのだという意識がいかに重要であるかが分かります。

4 もしその家族が羊一匹の分より少ないのであれば、その人はすぐ隣の家の人と、人数に応じて取り分けなさい。一人ひとりが食べる分量に応じて、その羊を分けなければならない。

誰もが不足することもなく、また有り余ることなく分け合います。この原則をパウロは教会にも適用して、「2コリ8:14 今あなたがたのゆとりが彼らの不足を補うことは、いずれ彼らのゆとりがあなたがたの不足を補うことになり、そのようにして平等になるのです。」と言いました。

5 あなたがたの羊は、傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。

いけにえの羊は「傷のない」ものでなければいけません。なぜなら、神は完全なもののみを受け入れるからです。不完全なものは、ご自分が完全であるがゆえに受け入れることができません。私たちの救い主イエス・キリストは完全な人生を送られました。肉体を持っていたので人間の弱さは持っていましたが、その弱さのゆえに罪に屈することはありませんでした。死刑の判決を受けようとも、数多くの人が、実に裏切り者イスカリオテのユダをしても、この方には罪がないと言わしめたのです。

6 あなたがたは、この月の十四日まで、それをよく見守る。そしてイスラエルの会衆の集会全体は夕暮れにそれを屠り、7 その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と鴨居に塗らなければならない。

「十四日までそれをよく見守る」とありますが、イエス様は日曜日の棕櫚の聖日にエルサレムに

入城され、そして十四日の過越の祭りにおいて十字架につけられました。その間、宗教指導者から試されるような質問を受けられましたが、この方が捕えられることはありませんでした。そして、「夕暮れにそれを屠り」とありますが、日没の直前です。

そして、「その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と鴨居に塗らなければならない。」とあります。後に、滅ぼす者、おそらくは神の裁きを執行する御使いでしょうが、やってくる時に、その血を見て過ぎ越します。それが門柱と鴨居に付けます。なぜ敷居に付けないのか？それは、血を踏みつけることはしていけないからです。血を踏みつけるということは、神の御子の贖いを踏みつけることです。「ヘブ 10:29 まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものと見なし、恵みの御霊を侮る者は、いかに重い処罰に値するかが分かるでしょう。」

8 そして、その夜、その肉を食べる。それを火で焼いて、種なしパンと苦菜を添えて食べなければならない。

祭りは基本的に食事です。食べて、腹の中に入れることによって、出エジプトの出来事がそのまま自分たちのものになるべく、神と交わるのです。これが聖餐式における基本でもあります。口の中に入れて、イエス様の肉と流された血を自分のものとしていくのです。しかも家族の中で行なうので、神の家族の中で一つになっていることを経験します。

ここでは、火で焼いた子羊を食べます。そして、種無しが入っていないパンを食べますが、種無しパンの祝い、間もなく出てきます。そして「苦菜」を食べます。今のユダヤ人はこの苦菜を、エジプトの奴隷時代の辛苦を思い出すためにしていますが、我々キリスト者にとっては、罪による苦々しい思い出を表しているでしょう。私たちが神の恵みを知るためには、過去の罪によってもたらされた苦さもあるのです。

9 生のままで、または、水に入れて煮て食べてはならない。その頭も足も内臓も火で焼かなければならない。10 それを朝まで残してはならない。朝まで残ったものは燃やさなければならない。

「火で焼く」のは、神の裁きを表しています。血を流され、そして火で焼かれ、それを食べるということは、神の罪に対する怒りが血を流すことによって宥められ、そして御怒りにある火があり、その身代わりになった肉を私たちが食することを意味します。そして、なぜ朝まで残していけないのか？ただ一度のいけにえだからです。あとで取っておいて、食べるものではありません。ただ一度、子羊が死んで、その血が流されたことによって、エジプトの災いを過ぎ越すことができることを思い出します。「ヘブル 9:25-26 それも、年ごとに自分の血でない血を携えて聖所に入る大祭司とは違い、キリストはご自分を何度も献げるようなことはなさいません。もし同じだとしたら、世界の基が据えられたときから、何度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかし今、キリストはただ一度だけ、世々の終わりに、ご自分をいけにえとして罪を取り除くために現れてくださいました。」

11 あなたがたは、次のようにしてそれを食べなければならない。腰の帯を固く締め、足に履き物をはき、手に杖を持って、急いで食べる。これは【主】への過越のいけにえである。

すぐに食べなければいけないのは、理由が後で出てきます。ファラオが急いでイスラエル人を追い出すため、ゆっくり食べる時間がないからです。「腰の帯を引き締める」のは、当時の衣服は、一枚のつぎあわせた布によってできており、裾をまくりあげないと動きづらいからです。

12 その夜、わたしはエジプトの地を巡り、人から家畜に至るまで、エジプトの地のすべての長子を打ち、また、エジプトのすべての神々にさばきを下す。わたしは【主】である。

「すべての神々」とは、エジプトが自分たちの力と富を表しているあらゆる偶像礼拝のことを指しています。ナイル川もそうですし、牛もそうですし、呪法師が肌をきれいにするのも彼らの宗教の一つでした。特に、エジプトの祭りで「セド祭」というものが例年あります。ファラオが行った王位を更新させる祭りです。王の活力の回復を祈願したのですが、おそらく主がエジプト血を行き巡る時に、セド祭に象徴されるファラオの力を全て潰してしまう意味を持っていたことでしょう。<sup>1</sup>

13 その血は、あなたがたがいる家の上で、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたのところを過ぎ越す。わたしがエジプトの地を打つとき、滅ぼす者のわざわいは、あなたがたには起こらない。

滅びから守られ、救われる条件は唯一つ、「血」です。イスラエル人の家の長子が、家の中から出ないで、その家に門柱と鴨居に血が塗られているということだけで、それを見て、御怒りが過ぎ越すのです。これが、私たちに与えられた神の救いです。私たちが何を行ったのか？が問題ではありません。そうではなく、ただ一つ、キリストの流された血があるから、そのキリストに留まるということが、私たちの救いなのです。

14 この日は、あなたがたにとって記念となる。あなたがたはその日を【主】への祭りとして祝い、代々守るべき永遠の掟として、これを祝わなければならない。

この一回性の出来事で、永遠の救いを表しています。キリストが死なれたただ一度の出来事は、私たちの永遠の救いを与えることができます。途中で、その効力がなくなり、私たちが地獄に行くようになるということはないのです。一切の罪をキリストが私たちのために負ってくださいました。

## 2C 種なしパン 15-20

15 七日間、種なしパンを食べなければならない。その最初の日に、あなたがたの家からパン種を

---

<sup>1</sup> <https://kotobank.jp/word/%E3%82%BB%E3%83%89%E7%A5%AD-1179727>

取り除かなければならない。最初の日から七日目までの間に、種入りのパンを食べる者は、みなイスラエルから断ち切られるからである。

ここから、過越の祭りと一緒に祝われる、「種なしパンの祝い」の説明があります。十四日に子羊を屠って、日没になると十五日になります。そこから過越の食事が始まります。その日、十五日から七日間、毎日、種無しのパンを食べます。パン種とは、パンの粉を膨らますイースト菌のことです。それが無いパンなので、ほとんどクラッカーのような形状です。私たちは聖餐式の時に、マツァと呼ばれる、ユダヤ人の人たちが使っている種無しパンを使って、聖餐にあずかっています。

16 また最初の日に聖なる会合を開き、七日目にも聖なる会合を開く。この期間中は、いかなる仕事もしてはならない。ただし、皆が食べる必要のあるものだけは作ることができる。

完全な安息を守ります。他の祭りでもそうですが、仕事をしてはいけないという強い戒めがあります。なぜか？それは、主が行われたことを祝うためです。私たちが何かを行って、それで神が何かをしてくださった、ではなく、まったく一方的に主が行われたことを、その恵みを受け入れるのです。これが、礼拝の姿でもあり、私たちは立ち止まらなと、主が行われていることを認めることができないのです。

17 あなたがたは種なしパンの祭りを守りなさい。それは、まさにこの日に、わたしがあなたがたの軍団をエジプトの地から導き出したからである。あなたがたは永遠の掟として代々にわたって、この日を守らなければならない。

興味深いことに、新改訳2017ではこれまで「集団」と訳されていた所を、「軍団」と訳しています。そうです、主がこの奴隷の集団であるイスラエルを軍団とみなしておられます。主がイスラエルの為に、敵に戦われます。彼らを滅びから救われます。私たち教会も、神に愛された軍団なのです。

18 最初の月の十四日の夕方から、その月の二十一日の夕方まで、種なしパンを食べる。19 七日間はあなたがたの家にパン種があってはならない。すべてパン種の入ったものを食べる者は、寄留者でも、この国に生まれた者でも、イスラエルの会衆から断ち切られる。20 あなたがたは、パン種の入ったものは、いっさい食べてはならない。どこでも、あなたがたが住む所では、種なしパンを食べなければならない。」

何度も、パン種の入ったものは決して食べてはならないと神は命じておられます。そして、それを破るものならイスラエルの会衆から断ち切られると警告しておられます。この「断ち切る」は、神との契約から一切断ち切られること、つまり神の救いを失うのと等しいです。どうしてそこまで厳しい命令を神が与えられておられるのでしょうか？

それは、過越の祭りと同じように、神がキリストにおいて行われる贖いの業を表しているからです。キリストが死んでくださり、罪が取り除かれました。それは、私たちが犯したいっさいの罪であり、私たちの良心は完全に清められたのです。種なしのパンは、「キリストの贖いによって、完全に罪が取り除かれた。」ことを意味します。まず、コリント第一 5 章 7-8 節を読んでみましょう。「新しいこねた粉のままにいられるように、古いパン種をすっかり取り除きなさい。あなたがたは種なしパンなので、私たちの過越の子羊キリストは、すでに屠られたのです。ですから、古いパン種を用いたり、悪意と邪悪のパン種を用いたりしないで、誠実と真実の種なしパンで祭りをしようではありませんか。」ここで使徒パウロは、パン種を罪として捉えています。わずかなパン種が粉全体を膨らますように、私たちが生活の中で罪を許すと、それが生活全体に影響を与えます。その形容からパン種は罪を表しています。その罪が、過越の子羊によって完全に取り除かれたことを示しています。なんとすばらしい福音でしょうか！私たちの罪は一切が清められました。

### 3B 血の塗り付け 21-28

21 それから、モーセはイスラエルの長老たちをみな呼び、彼らに言った。「さあ、羊をあなたがたの家族ごとに用意しなさい。そして過越のいけにえを屠りなさい。22 ヒソプの束を一つ取って、鉢の中の血に浸し、その鉢の中の血を鴨居と二本の門柱に塗り付けなさい。あなたがたは、朝までだれ一人、自分の家の戸口から出てはならない。

主から命令を聞いたモーセとアロンは、長老たちにこの命令を伝えています。「ヒソプ」は、中東で岩地に生い茂っている植物ですが、清めの儀式に用いられるようになります。そしてダビデがベテ・シェバと犯した罪のことで、このように祈っています。「詩篇 51:7 ヒソプで私の罪を除いてください。そうすれば私はきよくなります。私を洗ってください。そうすれば私は雪よりも白くなります」

23 【主】はエジプトを打つために行き巡られる。しかし、鴨居と二本の門柱にある血を見たら、【主】はその戸口を過ぎ越して、滅ぼす者があなたがたの家に入って打つことのないようにされる。24 あなたがたはこのことを、あなたとあなたの子孫のための掟として永遠に守りなさい。

「あなたとあなたの子孫のための掟」とモーセは言っています。永遠に守るために、これを継承させていかなければいけないということです。私たちにとって、これは何を意味するのか？私たちが信仰を持つだけでなく、次に人々がキリストの救いを受け入れるように伝えていくことに他なりません。肉の家族の中でもそうですし、周囲の人々に対してもそうです。

25 あなたがたは、【主】が約束どおりに与えてくださる地に入るとき、この儀式を守らなければならない。26 あなたがたの子どもたちが『この儀式には、どういう意味があるのですか』と尋ねるとき、27 あなたがたはこう答えなさい。『それは【主】の過越のいけにえだ。主がエジプトを打たれたとき、主はエジプトにいたイスラエルの子らの家を過ぎ越して、私たちの家々を救ってくださったのだ。』すると民はひざまずいて礼拝した。

過越の祭りを初めとするイスラエルの祭りは、子供に対する視聴覚教材になっています。その儀式の一つ一つの手順が、子供が「なんで？」と質問させるようになっているからです。その疑問に親が答えることによって、世代間で祭りを継承することができるようにされました。私たちは、信仰に「生活臭」があるようにしなければいけません。生活臭というのは、単に頭だけのこと、知識だけのこと、綺麗ごとにするのではなく、毎日の生活の真ん中にキリストをお迎えしなければいけないということです。私たちは学びだけで、過越の祭りを見ているが、メシアニック・ジューと呼ばれるユダヤ人の信者の方々は、生活が祭りによって回っています。それを見ると、いかに家族が子供にその信仰を継承できているかを知るのです。「父たちよ。自分の子どもたちを怒らせてはいけません。むしろ、主の教育と訓戒によって育てなさい。(エペソ 6:4)」

28 こうしてイスラエルの子らは行って、それを行った。【主】がモーセとアロンに命じられたとおりに行った。

彼らは聞いただけでなく、聞いて従順になりました。これが信仰の最後のステップです。信仰は聞く所から始まりますが、主に信頼して、信頼しているので聞いていることに従順になります。

## 2B 出エジプト 29-51

主が、モーセを通してイスラエル人に準備をさせたのちに、主が最後の災いを実行されます。

### 1C ファラオの追い立て 29-42

29 真夜中になったとき、【主】はエジプトの地のすべての長子を、王座に着いているファラオの長子から、地下牢にいる捕虜の長子に至るまで、また家畜の初子までもみな打たれた。

この時のファラオは、アメンホテプ二世と言われていますが、その後継者であるトメス四世は長男ではありません。ここで長男が死んでいるからです。そして、裁きは無差別でした。王室の王子から、地下牢の捕虜の初子に至るまで、とあります。身分の高さや低さは、神の裁きにはまったく関係ないのです。白い大きな御座では、死んだ人が、大きい者も小さい者も裁きを受けているのを、黙示録 20 章 12 節で見ることができます。

30 その夜、ファラオは彼の全家臣、またエジプト人すべてとともに起き上がった。そして、エジプトには激しく泣き叫ぶ声が起こった。それは死者のいない家がなかったからである。31 彼はその夜、モーセとアロンを呼び寄せて言った。「おまえたちもイスラエル人も立って、私の民の中から出て行け。おまえたちが言うとおりに、行って【主】に仕えよ。32 おまえたちが言ったとおりに、羊の群れも牛の群れも連れて出て行け。そして私のためにも祝福を祈れ。」

このようにしてファラオは、朝になるのを待ちませんでした。自分の息子が殺されたのを見て、これで無理やりにでもイスラエルを追い出す動機づけになりました。神が最終的に人を裁かれるとき

は、人は、無理やりにでもイエス・キリストを主と認めざるを得ません。救いの中にある神との愛との関係と対照的です。そして、ファラオが出した四つ目の妥協案で「羊と牛はエジプトにとどめておけ」という条件はここで捨てています。けれども、「私のためにも祝福を祈れ」といっていますね。まだ自分を手放していません。

33 エジプト人は民をせき立てて、その地から出て行くように迫った。人々が「われわれはみな死んでしまう」と言ったからである。34 それで民は、パン種を入れないままの生地を取り、こね鉢を衣服に包んで肩に担いだ。35 イスラエルの子らはモーセのことばどおりに行い、エジプトに銀の飾り、金の飾り、そして衣服を求めた。36 【主】はエジプトがこの民に好意を持つようにされたので、エジプト人は彼らの求めを聞き入れた。こうして彼らはエジプトからはぎ取った。

エジプト人のほうが、彼らが出ていくのを手助けしました。そして、種無しパンを彼らは持って行きましたが、興味深いことに、彼らは主の命令を守っていることもさることながら、それは急いでいたから入れる時間ありませんでした。そして好意を神が与えられています。後に幕屋のために用いるためでありましたが、彼らは奴隷であったためもらっていなかった賃金の意味も兼ねています。

37 イスラエルの子らはラメセスからスコテに向かって旅立った。女、子どもを除いて、徒歩の壮年男子は約六十万人であった。

これは二十歳以上の男性です。60 万人ですから女子供合わせると 200 万人はいたことでしょう。ヤコブはエジプトに下るときに七十人しかいませんでした。主が、アブラハムに約束されたように、子孫を増えさせてくださったのです。そしてこのように、神の御業は、初めは卑しく見えますが、確実に増え、多くの実を結びます。

38 さらに、入り混じって来た多くの異国人と、羊や牛などおびただしい数の家畜も、彼らとともに上った。

イスラエル人ではない人たちも混じって入って来ています。つまり、イスラエル人だけでなく、他の民族もエジプトの中で奴隷であった人たちがいました。他のセム系の民族ではないかと思われる。この大いなる出来事によって、大きなドラマの中で、勢いで出てきた人たちもいるでしょう。政治的な理由によって、奴隷身分の解放として出てきた人たちもいるでしょう。動機はどうかあれ、彼らとイスラエル人との違いは、「神の命令に従って出てきたのではない。」ということです。

初めは同じ行動を取っています。けれども、後に彼らは荒野の生活を送っているイスラエルの共同体に貪りを引き起こします。食べるものがなくて、エジプトで食べたものがなつかしいと言って、貪ったのです。「彼らのうちに混じって来ていた者たちは激しい欲望にかられ、イスラエルの子らは再び大声で泣いて、言った。「ああ、肉が食べたい。エジプトで、ただで魚を食べていたことを思い出す。きゅうりも、すいか、にら、玉ねぎ、にんにくも。(民数 11:4-5)」

私たちは、信仰を持っている人たちのようにふるまうことができます。たとえ動機が違って、同じように行動することはできるのです。けれども、心にあることは必ず口によって、行いによって現れ出ます。自分が、神のみことばを聞いて、それを信じて行っていることなのかどうか、よくよく吟味しなければいけません。

39 彼らはエジプトから携えて来た生地を焼いて、種なしのパン菓子を作った。それにはパン種が入っていなかった。彼らはエジプトを追い出されてぐずぐずしてはられず、また自分たちの食糧の準備もできなかったからである。

先に話しましたように、パン種を入れないで食べるのは神の命令でありましたが、時間がなかったのでパン種を入れようにも入れられませんでした。

40 イスラエルの子らがエジプトに滞在していた期間は、四百三十年であった。41 四百三十年が終わった、ちょうどその日に、【主】の全軍団がエジプトの地を出た。42 それは、彼らをエジプトの地から導き出すために、【主】が寝ずの番をされた夜であった。それでこの夜、イスラエルの子らはみな、代々にわたり、【主】のために寝ずの番をするのである。

かつて主はアブラハムにイスラエルは四百年の間エジプトで苦しめられる、と言われました(創世記 15:13)。けれども、そこではエジプトの中で苦しめられて、とあるのですが、こちらはエジプトに滞在した期間のことです。おそらく、これは 1876 年から 1446 年のことを指しています。

そして、夜の間も主は彼らを一瞬たりとも目を話すことなく、守り導かれました。それゆえ、イスラエルは過越の祭りの時は目を覚ましていると著者モーセは注釈を加えています。「見よイスラエルを守る方はまどろむこともなく眠ることもない。(詩篇 121:4)」との約束があります。また、私たちが目を覚ましていなさい、という命令もたくさんあります(マルコ 13:37 等)。

### 2C 異邦人の過越 43-51

43 【主】はモーセとアロンに言われた。「過越に関する掟は次のとおりである。異国人はだれも、これにあずかってはならない。

入り混じった民族がいたので、主はこれから過越の祭りの時に彼らがどのように関わればよいかを指示しておられます。基本的に外国人はこれを食べてはいけません。なぜなら、これは主の救いに真に預かっている者のみが食べることのできるものだからです。過越の祭りの食事を、主が最後の夜に弟子たちと持たれたように、キリストの体の一部とされている者のみで聖餐式にあずかることができます。私たちは物理的に教会にいても、本当にキリストの体に属しているのかどうか、吟味してみないといけません。

44 しかし、金で買われた奴隷はだれでも、あなたが割礼を施せば、これにあずかることができる。

45 居留者と雇い人は、これにあずかってはならない。

興味深いことに、外国人でも奴隷は食べることができます。雇い人は食べることができません。なぜなら、奴隷は完全にその家に属しているからです。私たちとキリストとの関係をここでは表しています。私たちが全くキリストに属している者になっているとき、キリストに捕えられて、キリストの奴隷とされているから、私たちはキリストの中にあるあらゆる霊的祝福にあずかることができます。

46 これは一つの家の中で食べなければならない。あなたは家の外にその肉の一切れでも持ち出してはならない。また、その骨を折ってはならない。

子羊の肉を食べるとき、「骨を折ってはならない」とあります。これはイエス様が十字架上で死なれたときに成就しました。ヨハネ 19 章にあります。「イエスのところに来ると、すでに死んでいるのが分かったので、その脚を折らなかつた。・・・これらのことが起こったのは、「彼の骨は、一つも折られることはない」とある聖書が成就するためであり、(33,36 節)」こんな細かいことまで、過越の祭りはキリストの死を表していたのです！

47 イスラエルの全会衆はこれを行わなければならない。48 もし、あなたのところ寄留者が滞在していて、【主】に過越のいけにえを献げようとするなら、その人の家の男子はみな割礼を受けなければならない。そうすれば、その人は近づいてそれを献げることができる。彼はこの国に生まれた者と同じになる。しかし無割礼の者は、だれもそれを食べてはならない。49 このおしえは、この国に生まれた者にも、あなたがたの間に寄留している者にも同じである。」

外国人で奴隷の人であっても、またイスラエル人であっても、割礼を受けていることが前提です。割礼は、神がアブラハムに、その子孫がご自分の契約の民であることを示すしるしでありました。新約聖書には、心の割礼が書かれています。つまり、御霊によって新しくされた者たち、心が一新された者たちのみがあずかることができるということです。

50 イスラエルの子らはみな、そのように行った。【主】がモーセとアロンに命じられたとおりに行った。51 まさにこの日に、【主】はイスラエルの子らを、軍団ごとにエジプトの地から導き出された。

何度も何度も主は、「その日」と言って強調されています。何千年経っても、その日を思い起こすためです。イエス・キリストはその日を、ご自分の肉、ご自分の血を表す儀式として思い起こさせておられます。主が再び来られる時まで私たちはこの方の死を告げ知らせるのです。